

多様な新ニーズに対応する「がん専門医療人材（がんプロフェッショナル）」養成プラン  
取組の概要と推進委員会からのコメント

		整理番号	2
申請担当大学 (連携大学)	筑波大学(計12大学) (千葉大学、群馬大学、日本医科大学、獨協医科大学、埼玉医科大学、茨城県立医療大学、群馬県立県民健康科学大学、東京慈恵会医科大学、上智大学、星薬科大学、昭和大学)		
プログラム名	関東がん専門医療人養成拠点		
事業推進責任者	大河内 信弘(筑波大学医学医療系消化器外科教授)		
取組の概要			
<p>A) 連携8大学による“関東 AYA 希少がんセンターネットワーク”を教育拠点として整備し、がんゲノム医療、がんライフ・QOL 医療の教育実践の場とする。B) 連携大学内にあるゲノム、オミックス研究施設と連携し、深い学際的教養と幅広い研究的視野を持って、新たな医療価値を創造するがん専門医療人を養成する。A、B) 教育リソースが少ないこれらの課題分野に対して、全国がんプロ8拠点と連携した e クラウド教育体制を新たに構築し、大学院生教育を行う。大学や地域の医療職への FD、市民教育にもこの先進的な IT 環境を積極的に活用する。C) 諸外国の方が進んでいる制度や活動(AYA がんセンター、Team Oncology 等)については、多職種、多大学から成るチームで現地視察を行い、その長所・短所を拠点内の活動に反映させる。他方、東アジア、中東などでは現地での需要を掘り起こし、日本のがん医療のグローバル展開の礎とする。</p>			
<p>推進委員会からのコメント ○：優れた点等、●：改善を要する点等</p>			
<p>○小児がん拠点病院のない千葉、茨城、群馬において関東 AYA 希少がんセンターネットワークを整備する構想は独創的であり評価できる。</p> <p>○症例数や専門家が不足している課題について、他のがんプロ8拠点と連携した e クラウド教育体制の新規構築は挑戦的試みであり、かつリソースの有効利用という点から評価できる。</p> <p>○e クラウドにおいて、がんゲノム医療の新たな教育コンテンツなどを集積することは、全国のがんプロコースにおける教育の標準化にも波及効果が見込める。</p> <p>○国際化への取組を明確化している点が評価できる。</p> <p>○患者及びその家族から、がん医療に対する意見をダイレクトに得る機会を企画することは、患者目線の医療の観点から評価できる。</p> <p>○担当人員配置や教育内容、必要経費がすでに細部まで決定されており、構想の実現の可能性が高い。</p> <p>●地域医療機関との連携は十分ではないこと、多職種連携のプログラムが少ないことについては、対策の検討が期待される。</p> <p>●e-learning による受講者の知識取得の質保証を十分に検討する必要がある。</p> <p>●e-learning やオープンコースへの参加者は限定的であることが予想され、広く事業成果の普及・展開に努める必要がある。</p> <p>●ライフステージの多様性に配慮するためには、それぞれの世代の多様性に基づく脆弱度を評価し、それに基づいた医療介入等を提案する方法がまだ十分には確立していないことを踏まえ、従来の教育コンテンツの組み直しだけでなく新規開発なども考慮することが望ましい。</p>			